

万延元年の
フットボール

大下 武蔵

大江健三郎
万延元年の
フットボール

講談社

万延元年のフットボール

昭和四十二年九月十二日 第一刷発行
昭和四十三年二月四日 第八刷発行

著 者 大江健三郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―二―二
電話東京(九四二) 一―一―一(大代表)／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所 山晃製本株式会社

定 価 四九〇円

落丁本・函丁本はおとりかえいたします。

万延元年のフットボール

装帧
||
栗津
潔

1 死者にみちびかれて

夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手ざぐりする。内臓を燃えあがらせて嘔下されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が確実に軀の内奥に回復してきているのを、おちつかめ気持で望んでいる手ざぐりは、いつまでもむなしのままだ。力をうしなった指を閉じる。そして、軀のあらゆる場所で、肉と骨のそれぞれの重みが区別して自覚され、しかもその自覚が鈍い痛みにかわってゆくのを、明るみにむかつていやいやながらあとずさりに進んでゆく意識が認める。そのような、軀の各部分において鈍く痛み、連続性の感じられない重い肉体を、僕自身があきらめの感情において再び引き上げる。それがいったいどのようなものの、どのようなときの姿勢であるか思いだすことを、あきらかに自分の望まない、そういう姿勢で、手足をねじまげて僕は眠っていたのである。

眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる。欠落感ではなく、それ自体が積極的な実体たる熱い「期待」の感覚。見つけることができないと納得すると、あらためて再度の眠りへの斜面に自分を誘導しようとする、眠れ、眠れ、世界は存在しない。しかし今朝は、いかにも強い毒が軀のなか全体を痛くして眠りへの溯行を妨たげる。恐怖心が噴出しよう

する。陽がのぼるまで一時間はあるだろう。それまでは今日がどのような日であるかを把握できない。胎児のように、なにもわからないで暗闇のうちに横たわっている。かつてはそのような時、性的な悪習が便利だった。しかし二十七歳、既婚、養護施設にいた子供までいる現在では、手淫をする自分を考えると恥かしさが湧きおこってたちまち欲望の胚子をひねりつぶす。眠れ、眠れ、それができなければ眠った人間を模倣せよ。不意に暗闇のうちに、昨日人夫たちが淨化槽をつくるために掘った直方体の穴ぼこが見えてくる。痛む牀のなかでは荒廃した、苦い毒が増殖して、耳と眼、鼻、口、肛門、尿道から、チューブ入りゼリーのようにゆるゆるはみだそうとしている。

眠った人間を模倣したまま、僕は立ちあがり、渋滞しながら暗闇のなかを歩く。眼をつむり、牀のさまざまな部分を、ドア、壁、家具にうちつけては苦しい譫言じみた呻き声を発する。もっとも、僕の右眼は、真昼に強く見ひらかれても視力をもたない。右眼がそのようになった事情の奥底にひそむものを僕はいつ理解できるだろう？ それは厭らしく無意味な事故である。ある朝、僕が街を歩いていると、怯えと怒りのパニックにおちいった小学生の一人が石礫を投げてきた。僕は片眼を撃たれて舗道に倒れたまま、この事故についてなにひとつ理解することがなかった。僕の右眼は、白眼の部分から黒眼の部分にまたがって横に裂け、視力をうしなった。現在にいたるまで、あの事故の本当の意味を理解したと感じたことはない。しかもそれを理解することを惧れる気持がある。もしあなたが右眼を掌でおおって歩くなら、あなたは右前方に待伏せするじつに多くのものに出会わなければならないだろう。あなたは突然に衝突する。あなたはくりか

えし頭を、顔を強打する。そのようにして、僕の頭と顔の右半分は、生ま傷のたえまがなく、僕は醜い。しかも僕は眼の負傷以前から、それは母親が、美しくなるであろう弟に比較しながら、僕の成人後の容貌について予言した言葉をたびたび思い出させたのであるが、しだいに自分にそなわっている醜さの特性をあきらかにしていた。失われた眼が、醜さを日々更新し、つねになまましく強調しつづけているにすぎない。生来の醜さは日蔭にひそんで沈黙していようとする。それを日なたへひきずりだしつづけるのが、失われた眼の効果である。もっとも僕は暗黒にむかう眼に、ひとつの役割をあたえた。機能を喪失した眼を僕は、頭蓋の内側の暗闇にむかつて開かれている眼になぞらえた。僕の片眼は血のいっばいたまった、体温よりいくらか熱い暗闇をつねに見つめている。僕は、自分の内部の夜の森を見張る斥候をひとり傭ったのであり、そのようにして僕は、僕自身の内側を観察する訓練を、みずからに課したのである。

ダイニング・キッチンをとりぬけ、手さぐりしてドアをひらき、そこではじめて眼をあけると、黒ぐろとした晩秋の夜明けまえの大気のはるかな高みのみがわずかに白んでいる。まっくろの犬が駆けより、跳びついてこようとする。しかし犬はただちに僕の拒絶を理解して声をたてず、じっと軀をすくめて、その小さな鼻面をキノコのように暗闇からつきだして僕に向っている。僕は犬を脇にだきあげて、ゆっくり前へ進む。犬は臭い。抱かれたままじっとして荒い呼吸をしている。脇のしたが熱くなる。犬は熱病にかかっているのかもしれない。はだしの爪先が木枠にぶつかる。いったん犬を降ろし、手さぐりして梯子の位置を確かめ、それから犬を降ろした場所の暗闇をだきかかえると、もとどおりそこにすっぽりと犬がつまっている。微笑せずにはい

られないが、持続する微笑ではない。犬はきつと病気なのだ。難渋して梯子を降りる。穴ぼこの底には、ところどころはだしの踝をうずめるほどにわずかな水がたまっている。肉を搾った液のようにわずかな水。地面にじかに腰をおろしながら、水がバジャマのズボンと下穿をとおして尻を汚すのを感じ、しかも自分がそれを拒むことのできない者のように従順に受けいれていることに気がつく。しかし当然犬は、水に汚れることを拒みうる。犬はものをいう犬がしかも黙っているように黙ったまま、僕の膝の上で平衡をとり、震えている熱い躰を僕の胸にわずかによせていている。犬はその平衡をたもつために、鉤になっている爪を、膝の筋肉につきたててくる。自分がその苦痛をもまた拒むことができない者であるように僕は感じており、五分後、それに無頓着になる。尻を汚して睾丸と腿のあいだにしみとおってくる水にも、無頓着になる。172センチ、70キログラムの僕の肉体は、現にいまそれが位置している場所から昨日、人夫たちによって掘り出され遠方の川に棄てられた土の全量とかわらぬものに感じられる。僕の肉体は土に同化している。犬の熱さと、二匹の腔腸類の内側のような鼻孔だけが、僕の肉体と、まわりの土、湿った空氣の総体のうちで生きているものだ。鼻孔はおそろしい勢いで過敏になり、穴ぼこの底の貧しい匂いを、あたかも豊饒きわまりないそのようにどっさりあつめてくる。鼻孔の機能がまさにフルに働いているので、収集されてくる数しれない匂いのいちいちを弁別することができないばかりか、僕はほとんど気をうしなつて後頭部を、（それは直接に後頭部の頭蓋骨を、と感じられる）穴ぼこの壁面にうちつけたあと、ずっとそのまま千種類の匂いと少量の酸素とをとりいれつづけるのである。荒廃した苦い毒は、なお脉じゅうにつまっているが、もう外部ににじみでてく

る様子ではない。熱い「期待」の感覚はかえってこないが、恐怖心は解除された。僕は、あらゆるものについて無頓着になっており、現にいま、自分が肉体を所有していること自体について無頓着だ。ただ、完全に無頓着な自分自身を、いかなるものの眼も見えていないのが残念に思われる。犬？ 犬は眼をもっていない。無頓着な僕自身もまた眼をもっていない。梯子を降りきった時から僕は再びずっと眼をつむったままだ。

それから僕は自分が火葬に立ちあつた友人を、観照した。この夏の終りに僕の友人は朱色の塗料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこみ、縊死したのである。深夜までつづいたパーティから、病気の兎のような衰弱ぶりで戻ってきたかれの妻が、夫の不思議な縊死体を発見した。なぜ、友人は妻と共にパーティに行かなかつたか？ かれは妻をひとりだけパーティに行かせて書齋に残り、翻訳（それは僕と協同の翻訳の仕事である）をしているといった状態を、誰もあやしまないような型の人間であつた。

友人の妻は、縊死体の二メートル前から、パーティのおこなわれた場所まで、恐慌に髪を逆だて、両手をふりかざし、声のない叫びを叫び、子供っぽい緑の靴をひらひらおどらせて、誰の眼にも見えない真夜中の影を踏みながら、フィルムを逆回転させるようにまっすぐ駈けもどり、警察に通報すると、実家から迎えがくるまで静かにすすり泣いていた。そこで係官の調査の終わったあと、朱色の頭をして素裸の、腿には生涯の最後の精液をこびりつかせた、まさに救助しがたい死者の世話のすべては、僕と、友人の剛毅な祖母とがしたのである。死者の母親は、痴呆状態に退行して役に立たなかつた。ただ、死者の扮装を洗いおとそうとすると、不意に確実な意志を

主張してそれに反対したのみである。僕と老女たちは、弔問客をすべて拒み、三人だけで、間断なく隠微、迅速に、かれ固有の特性をもった膨大な数の細胞を破壊されつつある死者の通夜をした。どろどろにとけてなにかえたいのしれぬものにかわった甘酸っぱい薔薇色の細胞を、涸渇した皮膚がダムのようにせきとめている。朱色の頭をした友人の肉体は、かれが隣れにも勤勉に狭い暗渠をくぐりぬけるように生きて、しかも向うがわに抜け出すまえに、突然おしまいにしてしまった二十七年の生涯のいかなる時においても緊迫した、危険な実在感をたたえて、軍隊風の簡易ベッドに横たわり、傲岸に腐敗しつづけた。皮膚のダムは決潰をせまられている。発酵した細胞群が肉体そのものの真に具体的な死を、酒のように醸している。生き残った者らはそれを飲まねばならない。友人の肉体が百合のように匂う腐蝕菌とあい関って刻む濃密な時間は、僕を魅惑する。僕は、友人の死体が、その存在の全期間にわたって、ただいちどきりの飛行をおこなう醇乎たる時間圏を見まもるうちに、くりかえし可能で幼児の頭頂のようにやわらかく暖かい、もうひとつ別の時間の脆さを納得させられた。

僕は嫉妬せざるをえない。やがて最終的に眼を閉じた僕の肉体が腐敗の時間を体験するあいだ、友人の眼がそれを見まもり、その正当な意味を了解してくれることはないのである。

——かれが療養所から帰ってきたとき、もういちどあすこへ戻るようにすすめるべきでした。

——いいえ、この子があれば以上あすこに入っていることはできませんでしたよ、と友人の祖母は答えた。療養所で立派なことをしたこの子は、他の精神病者から、すっかり尊敬されました。それでもうあすこにとどまっていることはできなくなったのです。そのことを忘れて、あなたが

自分を咎めてはなりません。いったんこうなってしまうえば、本当にはっきりしてはいますが、この子は、あすこから出て、自由な生活を送ることになって本当によかったのですよ。もし、あすこで自殺するとしたら、顔を朱く塗って裸になって首をくくることなどはできなかったでしょう。あの子を尊敬している他の精神病者に妨害されましたよ。

——あなたがしっかりしていられるので力づけられます。

——誰もが死ぬんですよ。そして百年もたてば、たいていの人間が、どんなにして死んだかを詮索されはしません。自分のいっとう氣にいったやり方で死ぬのが最上ですよ。

ベッドの裾に坐りこんだ友人の母親は、やすみなく死体の足をさすっていた。彼女はおびやかされた亀のように、肩のあいだ深く頸をめりこませ、われわれの会話に反応しない。酷たらしいほど死んだ息子に似ている、平べったく植物的な顔の小さな造作がすべて、融けてゆく飴みたいにぐんにやりと弛緩している。僕はこのようにも即物的に徹底した絶望を表現している顔をかつて見たことがないと感じる。

——サルダヒコのような、と死んだ友人の祖母が脈絡のないことをいった。

サルダヒコ、僕はなにやら土俗的な滑稽の響きがするその言葉から、不確かながらも意味を喚起されそうになるが、僕の脳髓の脂肪質は疲労からすでに煮コゴリになっており、わずかに震えはするものの、その震えが拡大されて意味の糸をほぐしてゆくにはいたらない。僕が無益に頭をふりたてると、サルダヒコという言葉は意味の封印を解かれないまま、記憶の層の深みに錘りのように沈んで行った。

そしていま、わずかな水のたまっている穴はこの底に犬を抱いて坐っている僕の頭に、懐かしい記憶の鉱脈のあきらかな露頭として、サルダヒコという言葉が浮かびあがってきた。あの日以来凍結しつづけていた、この言葉の周辺に関わる脳髓の脂肪質の煮コゴリが融けたのである。サルダヒコ、サルダヒコノミコトは、天降る神々を天の八衢でむかえた。その闖入者群の代表としてサルダヒコと外交折衝したアメノウズメは、新世界の原住民たる魚どもをあつめて支配権を確立しようと試み、沈黙して抵抗した海鼠の口を、此ノロヤ答ヘヌロとナイフで切りさいた。頭を朱色に塗った、わが心優しい二十世紀のサルダヒコは、むしろその口を切りさかれる海鼠の同類ともいふべき人間だった。そのように考えると多量の涙が湧きだして頬から唇につたわり、犬の背中におちた。

死の一年前、友人はコロンビア大学での留学生活を中断して帰国すると、軽症の精神異常者のための療養所に入った。その療養所の所在と、そこにおける友人の生活について僕は、友人自身による報告より他のことを知らない。かれの妻や母、祖母もまた、湘南地方にあるというその療養所を実際に訪ねたことはなかったのである。友人がかれをめぐるすべての者に、そこを訪ねることを禁じた。いまとなつてみれば、果たしてそのような療養所が実在したかどうかも定かでない。

それでも、ともかく友人の言葉を信ずれば、療養所はスマイル・トレイニング・センター、または微笑道場と呼ばれていて、そこに収容された人々は、毎食時に多量の精神安定剤をのみ、昼も夜も、みんな穏やかに微笑して心安らかなる時をすごすのだ。それは、湘南にごくありふれた

海浜寮風の平屋建で、建物の半分がひとつのサニタールをなしている。昼間は、たいいていの患者たちが、広い芝生につくりつけられた数多くのブランコに腰をかけて話し合う。収容されている患者たちは、厳密に言えば、患者でさえない、いわば長逗留の旅行者である。精神安定剤を服用した旅行者たちは、この世界のもっともおとなしい家畜のような生きものとなって、おたがいになごやかな微笑をかわしあいながら、サニタールや芝生で時をすごすのである。外出は自由であるし、誰ひとり自分が監禁されていると感じるものはいないから、逃亡するものもない。

スマイル・トレーニング・センターに入って一週間目に、友人は新しい本や着かえをとりに戻ってくると、かれよりもまえに入院している穏やかに微笑した患者たちの誰にくらべても素早く愉快に、自分がこの風変りな場所に適應してしまったようだといっていた。ところがなお三週間たって、もういちど東京に戻ってきた友人は、あいかわらず微笑してはいるものの、かすかに悲しげなのだ。そして友人は、かれの妻と僕とに、こういう打あけ話をした。かれら患者たちに精神安定剤と食事を配る看護人が粗暴な男で、精神安定剤を服用して腹をたてることもできなくなっている無抵抗の患者たちに、たびたび、ひどいことをする。いささかの動機もなく、すれちがいざまに腹部を強打する、というふうなひどいことを。僕はセンターの責任者に抗議することをすすめたが、友人は、そんなことをしたら、院長は、おれたちが退屈のあまりに嘘をついているか、単なる脅迫神経症にかかっているか、あるいはその双方かだと思うだろう、といった。おれたちほど退屈しているものは、すくなくとも湘南海岸にまたといないんだし、おれたちはみな、おおかれ少なかれ、気狂いなんだから。その上、おれも精神安定剤のおかげで、自分が本当に腹

を立てているのか、そうでないのか、はっきりしない始末なんだよ。

しかし、その日からほんの二、三日後に、友人は、朝食時に服用すべく配給された精神安定剤をのまず、昼の分も、夜の分も同様に、水洗便器へ流してしまった。そして翌朝、自分が確実に腹を立てていることを発見すると、粗暴な看護人を待ち伏せして、かれ自身も相当の被害はこうむったものの、結局は看護人を半殺しにした。この事件によって友人はおとなしく微笑した僚友たちから、深く尊敬されたが、院長との話合いのあと自分はその出なければならなかった。日ごろのとおり愚かしげなほど善良に微笑してかれを見送る精神病者たちに挨拶の手をふって、スマイル・トレーニング・センタ―を去る時、かれは生まれてはじめてと感じるほどにも深甚な悲しみをいだいた。

——ヘンリー・ミラーが次のようにいつている、かれの悲しみと、おなじ悲しみをおれは体験したんだ。実際のところその瞬間まで、おれはミラーの文章の真実性を疑っていたんだがね。へわたしも一緒になって笑おうとしたが、笑えなかった。わたしはひどく悲しくなり、一生のうちでそのときほど悲しかったことはなかった。これは単なる表現の問題ではないよ。それからもうひとつ、やはりミラーの言葉が、それ以来おれをつかまえているんだ、へなんでもいいから、陽気にしていようじゃないか！」

スマイル・トレーニング・センタ―に滞在していた期間のあと、頭を真赤に塗った素裸での縊死にいたるまで、確かにミラーの言葉は、友人をとらえていた。へなんでもいいから、陽気にしていようじゃないか！」、友人は絶対に陽気に、早すぎる短い晩年を生きた。かれは、ある性的

な偏向におちいつて、その種の気狂い騒ぎに入りこんでゆきさえたのであった。この思い出は、友人の火葬のあと、疲労困憊して家に戻った僕が、妻ととりかわした会話にからみあってよみがえってくる。妻は、僕を待ちうけながら、ひとりでウイスキーを飲んでいて。それは僕が、酔っている妻を見た最初の日である。

僕は、家に戻るとすぐ妻と息子の部屋を見に行った。あのころ、僕の子供はまだ家にいた。夕暮だったが、子供はベッドに横たわっており、絶対に意味を表現しない茶色の眼で穏やかに、もし植物に眼があるなら、植物がそれを覗きこむものを見かえすような穏やかさにおいて、僕を見あげた。妻は子供の脇にいなかった。そして僕は、書庫の暗がり黙って坐りこみしたたかに酔っている妻を発見したのである。書棚のあいだの踏み台に、鳥が揺れる枝にとまるような様子で、おかしなバランスをとりながら腰をおろしている妻を見出したとき、当惑のあまりに僕はむしろ自分自身を恥ずかしく感じた。妻は、踏み台の側面をくりぬいた穴のなかに僕がかくしておいたウイスキーの瓶をとりだすと、そのまま踏み台に腰をおろして、瓶からじかにひとくち飲み、それからずっと少量ずつ飲みつづけて、緩慢に酔いを深めてきていたのだ。妻は、鼻孔から上唇を脂っぽく汗ばませたまま、機械仕掛けの人形のようにのけぞって僕をむかえたが、立ちあがることはできなかった。眼はすもものように赤く熱っぽいのに、服からのぞいている頸や肩の皮膚は、ざわざわと鳥肌だっていて、妻の軀全体に、胃の異常に駆りたてられて盲めっぽうに草を噛んではまた嘔いている犬の印象がある。

——きみは病気じゃないかい？ と、僕は滑稽なことをいった。

——病氣じゃないわ、と妻は鋭敏に僕の困惑を察すると、それを嘲笑する気分をあらわにして答えた。

——それではきみは本当に酔っぱらっているわけだ。

妻にむかって屈みこむと、疑わしげに、僕を見かえす妻の上脣のふちにこびりついて震えていた汗粒が、上脣のそりかえるうごきにつれて脇に転げおちるのが眼をとらえた。アルコールで重たげに湿っている汚らしい溜息が咬みついてくる。僕は死んだ友人の傍から持ちかえった、生きている人間の疲労にあらためて牀のすみずみまで黒ぐろと染められて、すすり泣きたい気分だった。

——まったくきみは酔っぱらっているよ。

——とくに酔っぱらってはいないわ。汗をかいているけれど、それは恐いからなのよ。

——なにが恐いんだ？ 赤んぼうの将来のことが恐いのか？

——頭を朱く塗って裸で自殺する人間のいることが恐いのよ。

僕は妻にそれだけのことを報告して、胡瓜の部分については削除しておいたのである。

——それはとくにきみが恐がらなければならぬことではないだろう？

——蜜もまた、頭を朱色に塗って、裸で自殺してしまうかもしれないから、私は恐いのよ、と妻はというと赤裸々に怯えをあらわしてうなだれた。

一瞬、身震いしながら僕は妻の頭髮の焦茶色のかたまりのうちに、死んでいる自分自身のミニアチュアを見た。死んでいる根所蜜三郎の朱色の頭、よく溶けていない絵具の粉の粒つぶが、耳